



母乳 育児 感染

赤ちゃんとお母さんのために

評者・牛島 廣治 日本母乳哺育学会理事長

この本のカバーは、赤ちゃんにやさしい印象を持つ、淡いピンク色で彩られている。表紙のタイトルは親しみやすい書体であり、表紙および中の絵も感じが良い。

この本は、医療従事者が外来、育児相談で母乳指導の役に立つことを目的として書かれている。同時に著者は母乳で育児する母親、これから育児する母親に読んでもらい、母乳育児に対する不安を除き、安心して子どもを育ててほしいと願っている。著者の人柄が表れている本である。

最初に Q&A として医療従事者が養育者から受ける質問とその解答を書いている。したがって通常の教科書、参考書とは異なる形式である。質問と解答は的を射てまとまっている。次に総論として母乳育児のメリット、母乳育児と感染に関する基本的事項、標準予防策ならびに各感染経路別の予防策が書かれている。その後に各論としてウイルス、細菌その他の微生物による感染症、最後に母乳育児中の薬についても触れている。その中に著者が強調したいところが随所に書かれている。

一般的な感染症の本は多くあるし、また母乳についての本はある。しかし、母乳、育児、感染の3つのキーワードで1人の著者が書いた本は見かけないと思う。したがって、この部分に焦点を当てた労作に感謝したい。また参考文献が最後に記載されているのも親切である。感染症の診断、予防、疫学、

外来の育児相談で 母乳指導に役立つ1冊



水野克己 著
定価 2,100 円(本体 2,000 円+税 5%)
A 4 判/南山堂/2008 年

治療などは up to date で変わることが多い。したがってまとめるのに苦労されたと思う。

感染時の母乳の与え方については大方については母乳を中止する必要はない。すなわち母親が治療をしていれば母乳に児に感染となる微生物が活性をもって存在しないこと、母乳には免疫物質が含まれること、母乳以外に例えば経胎盤感染がより感染に問題となる場合もあること、母乳と人工乳で感染率に差がない場合があること、児にワクチン・抗体などを出生時に与えていて児が防御できることなどである。多くの場合はこれに相当する。しかし、出生時には感染して

なく、明らかに母乳を介して感染し、それが児に生涯影響を及ぼすあるいは生死に関係する HIV 感染症の場合にはわが国では母乳の使用は行なわない。

またわずかながら可能性がある成人 T 細胞白血病では与えないことが望ましいと考えられる。HSV, HPV, HCV など産道感染を心配して帝王切開を行なう場合は、そこまでのリスク予防を考えるなら一般に人工乳となろう。それでも母乳の良さを考えて母乳を与えたいとする場合、毎回授乳時搾乳して Flash 法(ウイルスを不活化する温度に母乳を加熱し、素早く母乳の温度を下げる)による母乳中のウイルスの不活化も考えられよう。今後、医療従事者、養育者、研究者らを含めて検討すべきこともあろうが、このような本が出てきたことは非常にうれしく思っている。